新太平記（五）

義貞戰死の巻

山岡荘八

新太平記（五）

山岡荘八

講談社

新太平記（五）　義貞戦死の巻
昭和四十七年四月二十日第一刷

著　者＝山岡荘八
発行者＝野間省一
発行所＝株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京三九三〇
印刷所＝豊国印刷株式会社
製本所＝株式会社大進堂
定　価＝五八〇円
©山岡荘八　昭和四十七年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0393-249256-2253（0）　（文2）

新太平記

（五）義貞戦死の巻

裘幀　川田　幹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

千種枯れゆく

千種中将忠顕は、馬上からじっと西坂を見おろした。手綱をとる手は拳となり、兜の前立にある額はじりじりと汗を噴いている。眼は爛々と闘志に燃えて、屹然と立った姿は、義貞の軍陣姿によく似ていた。

「思いのほかの大軍でござりまするなあ」

そう云ったのはこの手の副将、坊門少将雅忠で、彼の小桜おどしの鎧は、午前の陽に映えて絵のように美しかった。

二人のうしろに従う軍勢は約四百……その前後を、今日は全山の僧兵約七千が、自慢の大薙刀を突きならべて道々をふさいでいる。

「まるで狂ったような勢いでのぼって来ます。大将は何者でござりましょう」

「大将は、昨日とおなじ高豊前守師重じゃ。あ奴、直義にひどく叱られたと見えるわ」

「叱られたと仰せられますると？」

「昨日霧の中で退いたゆえなあ……直義は一気に勝負を決そうとあせっているのに退いたのでは叱られるわ」
「しかし、あの勢いでのぼって来ると、間もなくここへ取りつきましょう。そろそろ討って出ましては」
「まあ待て。もっと引きつけてからでよい」
「と、仰せられても、あの大軍に押し寄せられましては……」
「案ずるな。引きつけるほどよいのじゃ。あの大軍が、みな山坂道に吸い込まれると、彼等の背後で奇蹟が起る」
「奇蹟……」
「そうじゃ。洛南からひそかに行動を起して来ている四条中将の軍勢が、いっせいに森や川原から躍り出て、敵の背後で鬨をあげよう。その折じゃ！　敵がはさまれたと知ってうろたえだした瞬間に、大石や小石の雨を降らせて討って出る。さすれば両側の谷々は彼等の死屍で埋まろう。もう暫くの辛棒じゃ」
　云われてはじめて坊門少将は忠顕の真意を知った。
（なるほどそれならば勝利は味方のもの……）
「では、引きつけるほど、あとの戦が味方の有利となるわけで」
「いかにも。戦のことはこの忠顕に任すがよい」
「あ、雲母坂と蛇ケ池を右に見て、先頭はこっちへ曲りました」
「それも計算ずみのこと」
「火を放ちましたあの堂塔に。彼等はここの聖地を焼き払う気と見えまする」

忠顕はそれを聞くと舌打して笑った。
「そのようなことをさせるものか。もうそろそろ味方の鬨があがる頃じゃ」
「あ、到頭味方の大薙刀がゆれだしました。矢合せでござりまする」
坊門少将雅忠が、そう云ったとき、全山をゆるがすような鬨の声があたりを包んだ。
その鬨が若し忠顕の予定していた四条隆邦勢の到着を知らせる鬨であったら、恐らく寄手は度を失って乱れ立ったに違いない。
が、それは全く逆であった。待ちかねている四条勢は姿を見せず、直義に煽られて、信仰の呪縛を解かれた高師重が、悪鬼のような姿で陣頭に立ってあげた足利勢の鬨の声だったのだ。
味方前線の山法師たちは、この鬨に度胆をぬかれて浮足立った。
この場合、僧兵たちが弓よりも打物とった戦に自信を持っていたということも一層それを早めたのだと云ってよい。
忠顕は、山法師どもが一段退きあがっては斬り返し、斬り返しては又一段と退いて来る戦の模様は見ていなかった。
(四条勢はどうしたのだ!? 来ぬ筈はない! 来ぬ筈は……)
若しそれがやって来なければ、彼の策戦は根底から崩れてゆく……そう思うと一時にカッと眼のくらむ想いであった。
「四条勢は、まだ見えぬかッ」
「見えませぬ。あ、あのようなところから、敵が這い上って参りまする。道ではございません。あの断崖を……」
「四条勢は……四条勢は……」

人間は思いがけない予定の狂いに遭遇すると、どのような練達の者といえども一瞬全く余裕を失くして、滑稽なほどに狼狽してゆくものであった。

むろん忠顕はそれほど未熟な者ではない。したがって、四半刻ほどの時を貸したら、必ず思考を切り換えて、新しい対抗策を建て得たのに違いない。が、このおりには全く時運は彼に「時――」を貸そうとしなかった。

敵の一隊が、道をそれて遮二無二大嶽にたどり着いたと思うと、そこから一条の烽火が高く青空を切ってあがった。

云うまでもなく大嶽の一角にたどり着いたという足利勢の、全軍への知らせの烽火であった。そして、その烽火を見ると、こんどは、東西いっせいに、それこそ空も山も一度に揺がす大喊声があがっていった。

これで、穴生のほとりで進撃を止めていた東坂本の軍勢も、再び進撃に移ったのに違いない。

不動堂に火の手があがった。

(しまった!)

忠顕が敵のあげた烽火の意味の重大さをハッキリ心に摑みとった時には、もう彼の四周は敵味方入りみだれての大乱戦だった。

「蹴ちらして押し進め! 僧俗ともに容赦するなッ。大講堂も文珠楼も焼き払え! 何の神仏などはとうにこの山にはおわさぬのだ。退く者があらば本領没収! 討てッ、宮も中将も容赦するなッ」

その怒号が、敵将高師重の声とわかったときには、忠顕の鎧にはすでに十指にまさる矢が立っていた。

「うぬッ、豊前ずれに討たれてなるかッ」

もはや傍に坊門少将の姿もなかったし、危急を東坂本へ知らせることも念頭になかった。
いや、今となっては知らせる必要は無かったのだ……敵の挙げた烽火で、味方もそれは充分に知り得た筈……
ただ、その烽火が東西呼応の総攻撃の合図とわかるだけに忠顕の心は苦しかった。
(誤った！　四条勢が洛中を容易に駈けぬけて来れると思っていたのが甘かった)
彼等も途中のどこかで、足利勢に囲まれて苦戦しているのであったら、すべての罪は自分にある……
「宮を……宮を、東へお落し申せ！　宮を……」
ここで尊良親王まで討死させてしまったのでは、千種中将六条忠顕の生涯は、父や祖父の案じていたとおり、ただ粗暴な一人の生れ損いに過ぎなくなろう……
(そうか。名和伯耆はこれを案じて訪ねて来て呉れたのであったか……伯耆守、後を頼むぞ！)
三木一草が一木一草になってしまったと嘆いていた長年……それが到頭一木だけになってゆく……
長年の面影を、流星のように脳裏に描き出した瞬間に、忠顕の乗馬はもんどり打って前へ倒れた。
何時しか互いに名乗り合う戦でもなく、誰が誰をめざす戦でもなくなっている。ただ双方が、眼をひきつらせて、狂ったように殺し合っている修羅場に変ってしまっている……
誰も自分たちが、何のために殺し合っているのかなど考えてもいない。馬から落ちた忠顕の躰のうえを、血によごれた無数の足が踏みつける。しかし、それはもはや苦痛でもなく重圧でもなかった。すでにそうした感覚は忠顕の五体を見すてて離れていってしまったらしい。
(宮を……主上を……)

忠顕は最後の意識で自分の一念を確めようとあせった。
（頼むぞ伯耆守……頼むぞ……）

勝利の夕陽

東坂本の本陣で、義貞と長年が、西坂口の危急を知ったのは、高師重の挙げた烽火によってであった。

いや、その前にすでに長年は、ふしぎな胸騒ぎを覚えてじっとしていられなかったのだ。

忠顕は自信あり気に聖運再開のいとぐちは自分の手で掴むなどと云っていたが、長年はそれほど今日の戦を簡単なものとは思っていなかった。

尊氏はまだ男山に陣を敷いて動かない……ということは、それだけ彼が慎重に、その前の市街戦の失敗を反省しているということだった。

大軍を都に引き入れ、そこで長期に滞在するということは、正成のよく云っていたように、軍兵を迷いの森へ連れ込んで自滅を待つようなものだった。

それだけに、船の便のある八幡近くに居て、充分糧食を蓄えながら機をうかがう策戦なのに違いない。ところが、直義はそれに反対している。

ここで一挙に叡山を占領し、主上方の軍勢を殲滅してしまわなければ、彼等の手に依る幕府再開の望みは達せられないと見て、わざわざ兄にさからっての総攻撃なのだ。

それだけに、これに失敗したら兄弟の間にはかつてなかった気まずい空気が醸し出されて行くであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

――それを覚悟の上での強行策なのだから、あらゆる面へ勝算をたてているのに違いない。
（四条勢など、恐らく山へは取りつけまい……）
四条中将隆邦も、公卿の中では抜群の将器であったが、彼等の集め得る軍勢には何としても質の違いがつきまとった。
もともと武士は、公卿に対してはげしい反感を抱いている。したがって、若し戦に加わる気ならば直接義貞のもとへやって来るに違いなく、隆邦のもとへ集る者は主として方々の山法師が主になろう。それに扶持をはなれた牢人や、無頼の徒や、野臥りなどの集合体で、この連中は、勝ち戦の時にはどんどん人数の殖える代りに、少し旗いろが悪くなると、そっくりそのまま戦場から霧のように消えかねない……
そうした訓練不足の手兵では、隆邦にどのような戦意があっても、洛中突破は出来なかろうと思っていた。
さりとて、都を遠く避けて迂回して来たのでは、今日の合戦には間に合わない。
（これは、あまり待ってはならぬ軍勢なのだが）
昨夜からその事はよくわかっていたが、信じきっている忠顕に、ハッキリそうは云い得なかった。それでわざわざ、
「――危いと見えましたらすぐさまお知らせを……」
再三念を押して来ていたのに、その知らせのないうちに敵の烽火が先にあがった。
義貞も烽火を見るとまなじりを裂いて起ち上った。さすがに彼は、電光石火の騎馬戦をいのちと誇る猛将だった。
「伯耆守、お許の不安は的中したぞ。馬を曳けッ」

立つのと命令するのとが一緒であった。
「千種中将は緒戦に破れた。宮を失うてはならぬ。お許もわれ等に続くよう」
長年は云われるまでもなく、すぐさま馬を曳かせていた。
「ここから四明嶽まで何刻かかるか」
「間に合いまする！　きっと間に合いまする」
「急ごう。来い！」
「あいや暫く……この方の敵も、ご覧の通り動き出しました。破られる怖れは万々ないとしても、山上の戦を案じて、われ等のあとを追う者があっては戦線がみだれまする」
「よし！　みなまで云うな」
義貞は馬上で声高に、甥の脇屋義治を呼び立てた。
「越後守参れッ。越後守！」
「はッ」
「お許は、味方の陣へ、馬を飛ばして布令て歩け。どのようなことがあっても、敵を空堀の外で喰いとめ、断じて中に入れてはならぬと」
「はッ。して伯父上は？」
「これより千種中将の救援におもむく。手勢は選りすぐった旗下に、名和伯耆の四百余騎を加えてゆく。どのようなことがあっても搦手の敵を蹴散らして戻るゆえ、一歩も寄手を御座所に近づけては相成らんぞ」
「心得てござりまする。では、すぐさま布令を。ご免！」
脇屋義治が、緋縅（ひおどし）の草ずりを鳴らして駈け去ると、義貞は昂然として馬首を立て直した。

「伯耆守、いざひと駈け、駈け散らして戻ろうぞ」
「ははッ」
長年はこのようなおりの義貞に、まことの武将の面目を見るのだった。尊氏もそうだったが、さすがに源氏の血筋だけあって、全く恐怖を知らぬもののように見えてゆく。
それだけに、正月の市街戦のおりは、どのように止めても敵の中へ深入りし過ぎて、散々正成を困らせたものであったが……
高々と出発合図の法螺(ほら)が鳴り出したときには、もう義貞は麓の林を山路にかかっていた。
旗下は何れも、一族の二男三男のひきいる精兵で、文字どおりの坂東武者、それが名和勢の精鋭を加えて同勢二千三百が土煙りを掻き立ててのぼってゆく。
まっ先にすすむ中黒の旗はあざやかだったが、列の後尾は土煙りにぼかされて遠くから確めがたい。恐らくこれも山頂で見ていたら、万に近い大部隊に見えていったに違いない。
義貞に続いて馬を煽りながら長年は、幾度も心で忠顕の無事を念じた。
ここで又一人、四天王が欠くることは、正成を失った主上方にとって、癒(いや)し得ない傷痕になってゆく……
他人のことはさておいて、長年自身、落胆がおそろしい気がするのだ。
義貞は、そうしたことを念慮に入れているのかどうか、今しも四明嶽を占拠して勝鬨あげ、ほっと一息入れている敵主力のまっただ中へ、馬もとめずに駈け入った。
恐らく彼等は、援軍がやって来るとしても、疾風の吹きかけるような、このような襲撃は思いも寄らなかったのであろう。
ワーッといちどに悲鳴をあげて道をひらいた。いや、開こうとしたのが、すでに混乱のもとにな

った。朝からの登山と合戦とで、それぞれが疲れきっている。疲れきっていても一息いれる心になっていなかったら、闘志がこれを支えてくれたに違いない。

ところが彼等は一息いれて、めいめいが汗とほこりを拭く気になっていたところへ、いきなり荒馬を乗り入れられたのだからたまらなかった。蹄を避けようとして動いたわずかな動きが、そのまま大きな力になって、谷ぎわにあった者から悲鳴をあげて四方の谷へ落ちだしたのだ。

まっ先に義貞が、ひと駈けすると、続いて江田、大館の荒武者どもが、第二、第三と人のうねりを煽り出す。

今まで戦勝を誇っていた足利勢は、このうねりのために、一瞬にして阿鼻叫喚の生き地獄を現出した。

バラバラと人だけが落ちるのではなかった。人の踏んでいた石が落ち、岩が落ち、馬が落ち、また人が落ちてゆく……

大軍だけに、それはとめどもない雪崩になって、見る間に数千人を谷の底へのみ込んだ……

勝敗は、ここでは完全に逆転した。

ただ彼等は、忠顕の生きている間に、この救援の手を伸し得なかったのだが……

義貞が一息いれて大嶽のはずれで馬をおりた時、名和長年は、顔も胸もわからぬまでに踏みつぶされ、ほこりと血にまみれて横たわった屍のそばに片膝ついてじっと頭を垂れていた。

義貞は何も訊かなかった。それが誰の屍体であるかを訊ねるのは、自分の胸にも、たまらなく侘びしい木枯を吹き抜かせてゆくだけだとわかっていたからであろう。

夕陽に右半面を照らされて、塑像のように動かなかった長年の肩だけが、かすかにゆれているのがわかった。

師重の死

尊氏が、光厳院を奉じて、八幡から本陣を東寺に移すと云い出したのは、千種中将忠顕が坊門少将雅忠とともに叡山で討死した七日後の、六月十四日のことであった。

あれからも、弟の直義は執拗に総攻撃を繰返している。しかし、戦況はいっこうにはかばかしい進捗を見せず、却って、西側から猛攻を続けていた高豊前守師重が、新田勢の手に捕われて山法師どもに渡され、見るもむざんな処刑に遭ったという知らせがあった。

それを知らせて来たのは高師直で、師直は苦りきった表情で八幡へ馬を飛ばしてやって来ると、

「このまま捨ておかれては、左馬頭さまが討死なさるやも知れませぬぞ」

と、のっけに云った。

尊氏がどのように弟想いであるかを計算に入れての、例の圧しつけるような口調であった。

「——なに、直義が急きすぎたというのか」

「——いや、もともと急いては居りました。急くお心はよくわかる。が、それに油をそそぐようなまずい事が起りましたわい」

「——何事が起ったのじゃ。申してみよ」

「——左馬頭さまに、不動明王の化身だの、八大王子のお告げだのとおだてられて、師重の大たわけめが殺されました」

「——なに、豊前守が討死したとか!?」

尊氏が、充分言葉に乗って来たのを見すまして、

「殺されたのではない。捕えられて坊主どもに八ツ裂きにされ居ったので」
師直は吐きすてるように云ってわきを向いた。恐らく彼にとっても一族の師重の死は、やりきれない出来事だったからに違いない。
一瞬尊氏の顔いろは変った。仮りにも一方の大将が、討死ならばいざ知らず、捕われて八ツ裂きにされるとは何たることか……？
よほどの乱戦でない限り、大将ともあれば名乗りかけての一騎討ちが、まだ当時の戦場の慣わしだったのだ。
「――すると、豊前守は、挑まれて遁げようとでも致したのか卑怯に」
「――ブルル！　その反対じゃ」
師直は千切れるように首を振った。
「――左馬頭さまが、八大王子権現のお告げがあったの、叡山にはもう神も仏もお留守だのと、出放題の煽てようをなされた故じゃ」
「――師直！　おぬしは何を云おうとしているのだ。肉親の死にあって逆上しているのかたわけめッ！」
はげしく叱りつけられて、こんどは師直はぐるぐると熊のように尊氏の床几のまわりを歩きだした。
蟬音の耳にやきつく男山八幡宮の大庭へ幔幕を張りめぐらし、尊氏は、きびしい武装で、日々軍状を聞いている。社殿のうちに光厳院父子がおわすので、近頃では必要以上に威儀を正しているその主人の前で、執事の師直は無作法そのものだった。
「――停れッ師直、停ってわかるように話さぬと、鞭を呉りょうぞ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.